



中国江南地方の地方志の文学資料分析：史的遺産 と詩跡的遺産の側面から

著者	許山 秀樹
発行年	2018-06-14
出版者	静岡大学
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026475

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02434

研究課題名(和文) 中国江南地方の地方志の文学資料分析 史的遺産と詩跡的遺産の側面から

研究課題名(英文) Literature data of chorographies in Jiangnan region of China

研究代表者

許山 秀樹 (Nomiyama, Hideki)

静岡大学・情報学部・教授

研究者番号：10257230

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：3年間で5本の論文を公刊できたので、まずまずの成果を挙げることができたと言える。本研究は、地方志が文学作品をどのように扱ってきたかを明らかにするとともに、そこに掲載された詩文から新たな知見を得ようとするものである。本研究では、「濯纓」という詩語や、二人の文人、屈原と賈誼の典故を通して、地方において詩がどのように受容されてきたかを考察した。また、地方志を比較したり、そこに記載された詩跡を考察することによって、地方における詩の受容を反映している部分があることを示した。また、べん河の現地調査を行ない、詩の舞台であった場所がどのように詠い継がれ、また現在どのように受け継がれているかも明らかにした。

研究成果の概要(英文)：As we published five papers in three years, we can say that we produced reasonable results. This research aims to clarify how chorographies dealt with literary works and to obtain new knowledge from the poetry posted there. In this study, we examined how poetry has been accepted in rural areas through the poem "Zhuoying" and the allusions of two literary men QuYuan and JiaYi. In addition, by comparing chorographies and considering the poetic spots composed there, it has been shown that there is a part reflecting acceptance of poetry in rural areas. We also conducted a field survey of Bianhe to clarify how the place which was the stage of poetry was composed and how it was treated now.

研究分野：中国古典文学

キーワード：詩跡 唐詩 宋詩 地方志

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景の第一は、歴史・地理・文学の三分野にまたがる地方志という存在がこれまで不当に閑却されてきたことにある。地方志は大・中・小ささまざまな規模のものが、また、電子化されたものは少ないので、史料として扱いにくい存在であることは事実であるが、歴史・地理・文学の三分野の研究者が時折受動的に利用することはあっても、正面から利用したことはあまりない。研究代表者の研究に於いて、地方志に関わる数多くの問題点を見出したが、これまで放置されてきた。たとえば、地方志は全国各地で相互に確認をせず、個別に独立して編纂されたため、離れた地域の地方志の中に同一内容の伝承が“記録”されてしまうことがある。

第二の背景は、中国の地方志の文学遺産としての再活用である。中国の地方志は膨大に存在するため、また、電子化されていないので活用しにくかったが、研究代表者の調査結果では、貴重な文学史料が含まれていることがわかった。この文学史料によって、その土地が歴史的にどのような目で見られていたか、また、どのように文学遺産化されて歌枕（詩跡）として今日まで続いてきたかが未解決である。

2. 研究の目的

中国の地方志は、膨大な数が残されている。中国は歴史的に記録に重点を置いてきたため、様々な文献も記録として採録されてきた。そのため、中国の地方志の特色の一つに、文学作品が多数収録されていることを挙げられよう。文学作品掲載の多い地方志は「地域の文学案内」の様相がある。そのため、地方志は他国と比べて、文学作品が歴史的考証に役立つ存在となることがある。

しかしながら、地方志は未整理の状態であり、散逸したものもあるため、これまで十分な活用がされてこなかった。また、各地で勝手に作られたので、形式が統一されておらず、また、相互矛盾するものもある。本研究はその欠落を補い、地方志の中に豊富に存在する文学作品の史料価値を抽出して、文学研究を通して、歴史学・地理学・社会学に資することができるよう企図する。

3. 研究の方法

江南の地方志、詩跡、ゆかりの詩語をとりあげ、どのように詠い継がれていったかを考察する。その研究をモデルとして、周辺に範囲を広げる。各方面の研究に資するにしたい。

研究代表者は、主として文学的側面から、当該歴史旧跡がどのように文学のなかに読まれてきたか、という歌枕的視点から考察する。研究分担者の松尾幸忠は地理・歴史的側面から、考証を行なう。文学・歴史の2つの方面からの研究をすすめた。

4. 研究成果

(1) 代表者の許山はまず、江南ゆかりの詩

語として、「濯纓」を取り上げた。「濯纓」は南方に左遷された文人屈原にゆかりの詩語であるが、『孟子』・『楚辭』のなかでは「仕官」を含意する行為として用いられていた。儒家にも関連することばである。『孟子』は重要な経書であり、『文選』も詩人たちにとって必須の文獻であった。そこに記された「濯纓」=「仕官」という注釋も、詩人たちは知らないはずがない。だが、江南ゆかりの詩語である「濯纓」は、江南と切り離せない詩語であり、その緑豊かな風土に立てば、屈原を想起する後世の文人にとって、喧騒から離れた自然を想起する表現であり、「清浄なものへの希求」が感じ取れよう。そして、詩人たちが詩の中で用いたのは「脱俗としての「濯纓」」であった。『孟子』や『楚辭』の「濯纓」に対する伝統的な解釋よりも、「脱俗」という新たな解釋を詩人たちが優先したのはなぜだろうか。

その鍵は、「濯纓」=「仕官」の意味として用いられたいくつかの用例に求めうるのではないか。『文選』に含まれた庾亮「中書監を讓る表」、王儉「楮淵碑文」、沈約「齊故安陸昭王碑文」がそれである。これらがいずれも詩ではなく、表・碑文のなかにあるという点に注意したい。それらの文に求められていることは、事実の誠実な記録であり、ことばの正確な記述であった。したがって、『孟子』などの「濯纓」に附された注釈に沿って用いることが求められたのであろう。

一方、詩はそういった制約からかなり自由であった。必ずしも事実を述べる必要はない。それよりも、自己の心情に忠実であることが求められることもあっただろう。「濯纓」という表現から受けるイメージによって、あるいは、南方の水辺をさまよい、その後、仕官することのなかった詩人屈原のふるまいによって、詩語としての「濯纓」は汚れた官界から離れ、脱俗するという方向で解釈されていったのではないだろうか。文人たちにとって、屈原とは、書籍の中の人物ではない。詩人たちにとって、屈原はあくまでも、詩人たちの文學世界の存在であり、詩人としての生涯を支えてくれる存在だったのである。

左遷されることが多かった文人らの境遇やその地域の風土に即して、詩語が受容されることが考察できた。詩語は風土とともに存在するのである。

次に、安徽省周辺の地方志を入念に調査して明らかになった「虞姫墓」を代表者の許山が発表した。

唐代に最初に作られて以降、複数の「虞姫の墓」が各地に作られてきた。最初に作られたと思われる虞姫墓（定遠墓）は地理書で数多く記述され、「虞姫の墓」の中心的存在であった。それに対し、靈璧の虞姫墓は宋代になって史書に登場した後発の存在であり、地理書での扱いも虞姫墓（定遠墓）には及ばないと言えよう。にもかかわらず、「虞姫の墓」

を詠じた作品の数では虞姬墓（定遠墓）を上回っている。樓鑰、范成大らが靈壁で虞姬墓を詠じている。また、この二つの「虞姬の墓」の現状も、過去の地位と異なっている。靈壁の虞姬墓は現在、「虞姬文化園」として整備され、多くの史料やブロンズ像なども展示されて、注目を集める施設となっている。

その一方で、定遠の虞姬墓はインターネット上の画像で見る限り、あまり整備がされていないように見受けられる。最も大きい理由は、「垓下」とされる場所の問題であろう。学術的な考証はいまも続けられており、諸説あって、未確定と言うべきであろう。しかし、一般には、現在の安徽省蚌埠市固鎮県附近とされ、早くから信じられてきた。したがって、「垓下の戦い」前後に死んだとされる虞姬はその附近に埋葬されたと考えるのが自然であろう。虞姬墓（定遠墓）を「虞姬の墓」とするなら、垓下から南へ約百キロメートル以上も頭部を運んでそこで埋葬したと考えることになり、無理があると思われる。地理書にしばしば記述されたにもかかわらず、詩人たちがそこで詠んだ作品がそれほど増えなかったのは、地理的合理性に欠けていたためであろう。

虞姬墓（定遠墓）があまり詠じられなかった他の理由は、交通の便の悪さを挙げられよう。運河や街道が近くを通る靈壁を多くの文人は通過したであろうが、定遠はそれよりもっと不便なところにある。虞姬墓（定遠墓）を訪れた文人の絶対数は、靈壁よりも少なかったであろう。

虞姬は悲劇の中に死んだ美しいヒロインとして、古来、語り継がれてきた。「垓下」があった場所と信じられている地域の人々にとって、その靈魂の平安を祈り、墓を作ろうとしたのは自然なことであろう。自然発生的に各地で作られた「虞姬の墓」は消長を重ねながら、定遠と靈壁を除いて、ほぼ消滅したと言ってよい。そして、他の「虞姬の墓」よりも地理的合理性に於いて弱点の少ない靈壁の虞姬墓が現在ではもっとも著名な存在となっている。

虞姬に関する史料は乏しく、果たして、垓下で死んだのか、現状では不明と言うべきであろう。あるいはそもそも、実在すら疑わしい以上、史実としての墓を特定しようと試みることはほとんど意味がないというべきであろう。だが、詩跡としての墓はそれとは無関係に成立しうる。本研究では、詩跡としての「虞姬の墓」を考察の対象として、それがどのように出現し、詩跡としての地位を獲得していったかを考察した。悲劇のヒロインを悼む人々の思いが形となったのが各地の「虞姬の墓」であり、時が流れる間に地理的合理性が人々に意識され、合理性の劣る墓が淘汰されてゆき、後発の歴史的劣位性を克服して、靈壁の虞姬墓が詩跡としての「虞姬の墓」の地位を獲得したと言えよう。

数多くの地方志を調査し、「虞姬墓」がど

のように生まれ、消えていったかを明らかにした。

地理書研究の一例として、『嘉慶合肥県志』と関連する先行地理書を比較した。

詩文を数多く掲載している『輿地紀勝』と『方輿勝覧』への地理書としての評価は必ずしも定まっていなかったと思われる。『輿地紀勝』・『方輿勝覧』を好意的に評価する立場がいつ頃から広まって主流となったのか、現在はまだ定論がない。そこでそれを検証するための一例として、『合肥県志』を用い、そこに『輿地紀勝』と『方輿勝覧』がどのように活用されているか、考察してみた。

『輿地紀勝』と『方輿勝覧』について、「古跡」の部分では数多く引用されるなど、必ずしも無視されているわけではなかったが、重視されているとは言い難く、補助的に使われていると考えられる。『輿地紀勝』と『方輿勝覧』は境域などが書かれて居らず、地理上の基礎資料部分が比較的簡潔であるので、軽視される理由は分からないでもない。

では、『輿地紀勝』と『方輿勝覧』の特徴であった詩文で活用されたかと言えば、その点でもあまり重視されていない。むしろ、その成果を無視するかのようになり、そこからの引用を避けているように見受けられた。

しかし、「詩文は地理書にとって重要ではない」という立場に『合肥県志』が傾斜しているわけでもない。『合肥県志』のなかで『太平寰宇記』とともに重視された『江南通志』は文学作品をあまり重視していないが、それに比べれば、この『合肥県志』は地理書における文学作品の価値を認めているように感じられる。清代の地理書に於いて、文学作品をどう扱うか、また、文学作品を重視した『輿地紀勝』と『方輿勝覧』の地理書としての価値をどう見るか、は、『江南通志』と『合肥県志』を見る限り、必ずしも意見の一致がなされているわけではないようである。

『合肥県志』を手がかりに、地方志では文学作品がどう扱われてきたか、その状況の一端を明らかにした。

次に、地方において、文人がどのように受容されているかを考えるにあたり、ともすれば類似する人物像をあてがわれやすい屈原と賈誼について、それぞれに関わる典故を手がかりにして、考察した。そこから確認できたことは、屈原がその作品を含めてさまざまな側面によって形成されているのに対し、賈誼はその人生や事跡の側面を中心に人物像が形成されているという点である。また、屈原はそのまま謫地で死んだために、やや「縁起」が悪く、その知名度のわりに典故としては用いられなかったようである。とりわけ、他者に対して用いる場面では、屈原の典故の印象は薄い。この点では、長安に帰ることが出来た賈誼の典故がより活用されている。これは単に典故となりやすい傾向を持つか否

かとは別の、詩の中に用いられやすいか否かという問題も絡み、興味深い現象となっている。文人の生涯が典故として用いられる際には、単に有名であるというだけでなく、その人物がその後どうなったかという側面も重要なポイントとなると言えよう。

では、本稿で知り得たことを今後、活かすには、2つの観点があるだろう。

一つは、屈原の詩跡である。今、『中国詩跡事典』を見ると、屈原ゆかりの詩跡に、「屈原祠」「汨羅江」「屈原廟」「湘江」「阮江」がある。このうちの「屈原祠」「屈原廟」は複数存在する。「屈原を祭る廟祠は、湖北・湖南両省を中心に散在する」とされ、後世の人々がその死を悼んで各地で作られたものであり、屈原の特定の事跡とは関わりなく作られたものであろう。

一方、『中国詩跡事典』に見える賈誼ゆかりの詩跡は「長沙」「賈誼宅」である。いずれも賈誼の事跡と直接の関わりがある。後世の人々によって複数作られたものではない。

こう見てみると、詩跡の形成のあり方も、文人の生涯によって、大きく分かれていることが知られる。詩人のどの要素が典故として伝えられていくか、という点が、詩跡の形成のあり方とも大きく関わっていると言えよう。賈誼のように特定の事跡に即して詩跡が形成されるものもあれば、屈原のように、後世の人々から追慕されて、特定の事跡とは無関係に複数作られるものもあるのである。

屈原と賈誼ゆかりの詩文が地方志でどのように掲載されているかは今後の課題である。

代表者の許山と分担者の松尾は実地調査を行なった。松尾幸忠は主として汨河について、以下の考察を行なった。

汨河及び隋堤の柳が詩跡として定着したのは唐代である。主題としては大体四種類ほどに類別できる。作例数から見ると中唐から晩唐にかけて増加し、しかも懐古詩の中で煬帝に対する批判的な意見が目立つようになってくる。これは当時、交通網としての汨河の重要性が強く認識され始めたことを証明すると同時に、当時の唐王朝の政治に対する批判が高まってきたことを証明していると考えられよう。なお、その懐古詩を考察する際、汨河と隋堤の柳とは同時に詠まれることが多いが、作品によっては汨河の開鑿というテーマと、隋堤の柳から想起される隋の煬帝、及びその行状というテーマとは分けて考えた方がより理解しやすいのではないかと思われた。

唐代、そして次の北宋代に於いても汨河は大きな役割を果たした。しかしやがて南宋になると北方は金に占領され、汨河はたちまち荒廢し、やがて今日のように一部を遺してその殆どが消滅するに至るのである。

かつて転運使と節度使が、汨河の水を巡って争った時代は遙か過ぎ去り、曹苗段の碑文に

もあったように、今日では疾うに漕運の役割を終えた、僅かに遺った汨河の名残が、周辺の農家に灌漑用水として恩恵を施していることを実地調査で確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

許山秀樹、唐詩に見られる屈原と賈誼の典故の相違 - 後世に伝えられる人物像、情報学研究、査読あり、2017年、pp.1-27

松尾幸忠、詩跡としての汨河、中国詩文論叢、査読あり、第36集、2017年、pp.85-95

許山秀樹、地理書に見える二つの虞姬墓と詩跡化、中国詩文論叢、査読あり、第35集、2016年、pp.121-134

許山秀樹、安徽省『嘉慶合肥県志』における先行地理書の受容、情報学研究、査読あり、第22巻、2016年、pp.89-102

許山秀樹、「濯纓」の解釈にみる詩的印象の形成 - 詩語と詩人像の受容のありかたをめぐって、中国詩文論叢、査読あり、第34集、2015年、pp.1-20

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://shiseki.com/index.html>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

許山 秀樹 (NOMIYAMA,Hideki)
静岡大学・情報学部・教授
研究者番号：10257230

(2)研究分担者

松尾 幸忠 (MATSUO,Yukitada)
岐阜大学・地域科学部・教授
研究者番号：20209505

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()